

## 近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係 —キース・ヴィンセント氏による基調講演会を受けてのシンポジウム記録

Correlations in aspects of culture in the Asia-Pacific Region in Modern Times  
—Symposium transcript following keynote lecture by Dr. J. Keith Vincent

松村 茂樹<sup>1</sup>, 渡邊 顕彦<sup>2</sup>, 松田 春香<sup>1</sup>, 戸田山 祐<sup>1</sup>, 木村 淳<sup>3</sup>, 利根川 千枝子<sup>4</sup>, 廣野 朱音<sup>4</sup>, 傳 静<sup>4</sup>  
<sup>1</sup>大妻女子大学文学部, <sup>2</sup>大妻女子大学比較文化学部, <sup>3</sup>大妻女子大学非常勤講師,  
<sup>4</sup>大妻女子大学大学院修士課程

Shigeki Matsumura<sup>1</sup>, Akihiko Watanabe<sup>2</sup>, Haruka Matsuda<sup>1</sup>, Tasuku Todayama<sup>1</sup>, Jun Kimura<sup>3</sup>,  
Chieko Tonegawa<sup>4</sup>, Akane Hirono<sup>4</sup>, and Sei Fu<sup>4</sup>

<sup>1</sup>The Faculty of Humanities, <sup>2</sup>The Faculty of Comparative Culture, <sup>3</sup>Part-time lecturer,  
<sup>4</sup>The Master's Program, Otsuma Women's University  
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：近現代, アジア太平洋地域, 文化, 相関関係

Key words : Modern and contemporary, Asia-Pacific region, Culture, Correlations

### 抄録

2023年9月25日(月), 2023年度大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト「近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹) 基調講演会を開催した。講演者は、ボストン大学准教授のキース・ヴィンセント博士で、「「火焰を包みたる氷の如し」正岡子規の従兄弟、藤野古白について」と題し、日本語で講演いただいた。また、2023年10月30日(月), 基調講演会を受けての共同研究者全員によるシンポジウムがおこなわれた。ヴィンセント氏の講演からインスパイアされた点について各自発言した後、ディスカッションがおこなわれた。本報告はその記録である。

### はじめに

2023年9月25日(月) 14:40-16:10, 大妻女子大学千代田キャンパス G311A アクティブラウンジにて、2023年度大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト「近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹) 基調講演会を開催した。講演者は、ボストン大学准教授 Ph.D のキース・ヴィンセント (J. Keith Vincent) 氏である。

ヴィンセント氏は、『漱石の居場所 日本文学と世界文学の交差』(2019 岩波書店) の共同編者を務めるなど、米国における日本文学研究の第一線で活躍している。今回、「「火焰を包みたる氷の如し」正岡子規の従兄弟、藤野古白について」と題し、現在執筆中の著書から抜粋して、日本語で講演いただいた。

また、2023年10月30日(月), 16:20-17:50, 大妻女子大学千代田キャンパス H313 講義室で、基調講演会を受けての共同研究者全員によるシンポジウムがおこなわれた。ヴィンセント氏の講演からインスパイアされた点について各自発言した後、ディスカッションがおこなわれた。本報告はその記録である。

### シンポジウム発言内容

松村：みなさんご多忙中ご参集くださり、ありがとうございます。今日は、先日のキース・ヴィンセント先生講演会を受けて、共同研究者全員によるシンポジウムを開催いたします。キース先生の講演からインスパイアされたことをそれぞれお話しいただき、後ほどディスカッションができればと思います。

では、廣野さんからお願いいたします。廣野さんは、現在、台湾の国立清華大学服務科学研究所に留学中ですので、Zoomによる参加となります。

**廣野**：国際文化専修、修士1年の廣野朱音です。キース先生の講演を聴いた感想について話そうと思います。キース先生は、「子規は、夏目漱石と親密な交流があり、漱石は、子規から俳句の教えを受けた。」とお話しされていたのですが、子規にとっては、この交流が大きな励みとなって、より一層俳句に打ち込むことができ、たくさんの作品を生み出すことが出来たのだと思います。漱石もこの交流によって自身を高めることができても万人に愛される小説を残したのだと思います。子規と漱石のように切磋琢磨し合う友というのは、どのような学問においても大切なものだと思います。

キース先生は、俳句を詠むときに、花や木の名前など、自分が知らない単語などが書かれていて、内容が理解できない時は、辞書、google、文献などを調べたり、人に尋ねたりして、理解するようにしているとお話しされていました。最初は内容が分からない俳句でも、調べていけば、徐々に分かるようになっておっしゃっていて、研究をしている時に内容が分からなくても諦めないで、理解できるまで根気強く続けていくことが大切だと思いました。

また、キース先生は子規の俳句から「万歳（まんざい）や黒き手を出し足を出し」という句を紹介してくださいました。「この句の『万歳（まんざい）』という言葉を理解するために愛媛大学の先生に聞き、『お正月の踊り』であると教えてもらい理解することができた。」とお話しされました。このことより、キース先生から研究にはコミュニケーションが大切ということをお教えいただきました。

私の研究テーマは台湾のサービス文化についてなのですが、今は台湾にいますので、この貴重な機会を使って、現地の台湾の方々に興味を持ったことや疑問に感じたことは積極的に聞くようにしようと思いました。私は興味を持ったことや疑問に感じたことはすぐにネットで調べてしまう癖があるのですが、ネットで調べた後でも現地の人に聞いたほうが、より深く台湾のサービス文化について理解できるのではないかと思います。今後は、ネットで調べた後でも、現地の人に聞いて積極的にコミュニケーションをとって研究を進めてい

うと思います。

また、キース先生が紹介してくださった「万歳（まんざい）や黒き手を出し足を出し」という俳句から、リズムカルに踊ってお正月を祝う楽しい情景が浮かんできました。子規作品の素晴らしさを知る一句であると思いました。キース先生の話聞いて、キース先生は、結核を患っていずれ死ぬことがわかっても有意義な人生を送り、友情を大切にしたい子規のことが本当に好きで、尊敬しているということが伝わってきました。また、楽しんで子規の研究をしているということもよく伝わってきました。キース先生は楽しんで研究しているからこそ、長年子規に興味を持ちつづけ、子規の様々な面について研究することができていると思いました。私も今後はキース先生のように楽しんで台湾のサービス文化について研究をしていきたいと思いました。以上です。

**松村**：ありがとうございます。では、傅さん、お願いいたします。

**傅**：今回、キース先生の講演を聴いて、子規と彼の友人たちの美しい友情がとても印象に残りました。日本の文学者の友情のように、人と人のつながりは、影響し合い、助け合うことによって成長を遂げることができます。私は、今、主に中国のポピュラーカルチャーを研究しているんですけど、そこでもこのようなつながりを発見しました。

最近、世界的に人気がある中国のゲーム「原神」の中で、京劇役者のキャラクター・雲堇が歌う「神女劈靚」が、中国のみならず海外でも大きな注目を集めており、現時点でネット上での再生数が1,000万回を超えています。このゲーム「原神」とゲームに登場する京劇歌曲はなぜ世界的に注目されたのでしょうか。私は、日本の影響が大きいのではないかと考えています。中国の映画やゲームなどのエンタメコンテンツは、1978年12月に開始された改革開放に基づいています。改革開放により日本の映画が紹介され、中国では大きな日本映画ブームとなりました。そして、1980年代半ば、第五世代といわれる新世代の監督たちが、中国映画を世界に知らしめ、中国映画ブームを現出させたのです。その監督たちは、まさに日本映画に影響された世代であり、その第五世代を代表する監督の一人チェン・カイコー（陳凱歌）は、1993年に『さらば、わが愛 霸王別姫』という中国映画の最高峰といわれる映画作品をつくり出しました。この映

画は京劇俳優の世界を描いた作品で、この映画によって京劇は、中国の代表的伝統芸術文化として国際的に知られるようになりました。ゲーム「原神」の中で、京劇が使われたのも、その影響があると考えられます。中国のゲーム、そして京劇は、日本とのつながりはないように思えますが、実は日本とつながっており、このような深層的な国と国のつながり、そして異なる文化のつながりは多く存在するのではないのでしょうか。以上、私がキース先生の講演を聴いて、自分の研究とからめて思い至ったことの一つでした。ご清聴ありがとうございます。

**松村:**ありがとうございます。では、利根川さん、お願いいたします。

**利根川:**利根川です。よろしく申し上げます。キース・ヴィンセント先生は共同プロジェクト基調講演において、正岡子規の生涯と従兄弟である藤野古白との関わりについてお話ししてくださいました。拝聴して感銘を受けましたこととお話しさせていただきます。

キース先生は「子規に惹かれた理由として、彼は結核に感染しながらも、それを公表して生産的な生き方をしたからです。」と仰っています。当時、結核は不治の病とされて隔離した療養生活を余儀なくされていました。そのような状況の中で、子規は多くの俳句を詠み執筆活動をしています。病気を覚悟し死期を悟ったからこそ今を大切に意欲的に文筆活動をしたのだと思います。常に極限に置かれているからこそ研ぎ澄まされた文芸作品を生み出したのだと思います。

キース先生は「子規という号は「鳴いて血を吐くホトトギス」からです。」と仰っています。口の中が赤く優雅な声で鳴き結核の象徴とされていたホトトギス（子規）と自身を重ね合わせて子規と号しています。病に冒されても命ある限り最後まで心に響く歌を詠んでいきたいという切実でありながらも粹な決意を感じます。

キース先生は「子規は日清戦争に従軍して古白の自殺の知らせを受け取りました。病状が悪化し帰国後入院、その後、療養生活を送りました。後に『古白遺稿』を出版しました。」と仰っています。当時、子規は日本新聞社に就職していました。子規は自身の身体を顧みることなく従軍したのは、記者として「正しい真実の戦況」を伝えかけたのだと思います。文学者でもある子規は「悲惨な戦

争の現実」を文学に活かして平和を求めたかったのだと思います。すぐに駆け付けることもできない状況にある子規が、同郷で幼い頃から共にした古白の突然の死を受け入れた時の心の嘆きは計り知れないほどであったと思います。子規が『古白遺稿』を編集したのは、子規を慕い心の病に苦しんでいた古白に対して十分なことができなかった子規の償いの証しであり、古白が悩みながら詠んだ作品を世に遺したかった子規の切なる思いと言えます。

キース先生は「子規の居所に飛沫感染の恐れがあるにもかかわらず多くの人々が集まった。」と仰っています。文学に傾倒する青年たちは、そのようなリスクは論外であったと思います。珠玉の作品を生み出す子規に憧れ教を請い、句会を通して文学における向上をめざしたからだだと思います。子規は訪れる文士たちを拒むことなく受け入れ、彼らも動くことが困難な子規を気遣ったからこそ、句会が続き世にたくさんの秀逸な作品が送り出されたのだと思います。

キース先生の講演をお聴きして、限られた短い生命の中で多くの優れた文学作品を遺した子規の創作力に心を打たれるとともに、子規への理解を深めることができました。キース先生に厚くお礼を申し上げます。この共同研究プロジェクトにより研修の機会をいただきましたことに深く感謝いたします。皆様、ありがとうございます。

**松村:**ありがとうございます。では、木村先生、お願いいたします。

**木村:**木村と申します。よろしく申し上げます。私は明治から昭和初期の漢文教科書を研究しているので、松村先生が編集者のお一人である高校生用国語教科書とその指導書に編集協力者として四年ほど前から参加しています。漢文教材を担当し、正岡子規の漢詩一首（「夏目漱石の伊予に之くを送る」）の解説を書いたこともあり、今回のキース先生の講演を拝聴して、子規の俳句がいつ頃から教科書に掲載されたのかという点に関心を持ちました。現在、日本では幼稚園から高校まで、新しい学習指導要領に基づいた指導が行われています。高校の国語の指導は実用性ということが強調され、文学作品の教材も読解に偏らず、創作をすることも求められるようになりました。そのため生徒に自分の感じたことを随筆、短歌、俳句、漢詩などで表現させるような活動を教科書に盛り込まなければ



ならなくなりました。私が参加した教科書には江戸から現代までの俳句が十数首掲載され、子規の句では「いくたびも雪の深さを尋ねけり」が採録されています。これらを学習した後、季語を調べて俳句を作り、グループでディスカッションをする単元が設けられ、吸収するだけでなく表現することも重視した構成になっています。

現在の教科書にも掲載されている正岡子規の俳句がいつ頃から教科書に登場したのかということについて、『旧制中等教育国語科教科書内容索引』（田坂文穂，教科書研究センター，1984）を使って確認しました。これは国語教科書に掲載された教材を調べるツールの一つです。旧制中学は現在のような検定制度で、一つの教科につき十数種類の教科書が発行されていました。そのうちの一種の教科書（佐々政一〔醒雪〕編『校訂新撰国語読本』巻9，明治書院，1912）に子規の作品が掲載されています。あくまでも上記の書を使っての調査ですが、これが最も早い収録のようであります。

掲載された子規の句は、「湖（うみ）青し、雪の山山、鳥かへる。」という風景を詠んだもの、「樵夫二人、だまつて霧をあらはるる。」という生活感情のあふれた秀句であると評されるものです。これらは「明治の俳句」という単元に収められ、その後には「文学と人生」「明治の文学」「明治の和歌」という単元が続きます。同じ教科書には「近世の文学」「近世の和歌」という単元もあります。この教科書には序文もなく、編集者の意図は詳しくはわかりません。おそらくは現在の教科書のようにアウトプットを重視したものではなく、各時代の文体や文学作品の特色を理解させようという意図によって俳句が採録されたものと思われます。

このように時代による文学作品の役割は変わりますが、文学作品は非実用的なものではなく、活用の仕方によって教材とする意義は十分にあると思います。機会があれば日本における俳句の扱われ方について調べてみたいとも思います。

**松村:**ありがとうございます。では、戸田山先生、お願いいたします。

**戸田山:**戸田山と申します。私の専門はアメリカ史で、移民史研究をやっております。こないだのヴィンセント先生のご講演に触発されたということで、今日は南北アメリカの日系移民による俳句というものについてちょっとお話したいと思います。ここで対象とするのは、日系人による日本語

俳句です。日本語による創作活動が、異文化との接触および新たな環境によって影響を被ることを示す事例ということで注目いたしました。

南北アメリカの俳句の歴史は、これはもうほぼ日系人の歴史と重なるのだそうです。日本語新聞が現地で二十世紀初め頃から発行されるようになると、そこには文芸欄が設けられ、俳句が掲載されます。ブラジルなど相当早いようです。ブラジルでの俳句の初期の秀句とされるのが、こちらの上塚瓢骨の「夜逃げせし移民思うや枯野星」という句です。ここで、ヴィンセント先生の正岡子規のお話と関係してくるのですが、特にブラジルでは子規であるとか、あるいは、子規の系譜につながる高浜虚子のホトトギス派の影響が非常に強かったのだそうです。これは客観写生、そして花鳥諷詠、つまり現地の自然をありのままに詠む、風土をありのままに詠むというものです。ここで虚子の弟子であった佐藤念腹という人についてお話ししましょう。この念腹は、1927年（昭和2年）にブラジルに移住しますが、使命はブラジルでの俳句の普及だったそうです。そういう意気込みを持ってブラジルに移住し、それに対して虚子は、次の句をはなむけに送っていて、2つのバージョンが伝わっております。「鋤取って俳諧国を拓くべし」、「畑打って俳諧国を拓くべし」というものです。念腹はずっとブラジルに留まり、戦後のブラジル俳句の全盛期に1,000人以上の弟子を全国に持ち、月の半分は俳句指導で地方の移住地、ポルトガル語で言うところのコロニアを回っています。ブラジル各地に日系人の集落があるわけですが、そこを巡って句会を開いて、俳句の添削や指導によって生計を立て、暮らしていた。そういう稀有な人物でした。やはり日系人が、特に一世も含めて、第二次大戦後になると定住志向を強めていた、当時の時代状況を反映しているといっていると思います。しかし、ブラジルで俳句を詠む、あるいは、アメリカ合衆国本土やハワイで俳句を詠むということは、異なる風土、異なる季節を題材として俳句を詠むということになるわけです。季語もさまざまに変わります。そもそもブラジルは南半球ですから、季節が逆転する。それから、四季があるのか、ないのか、地域によって違うわけです。念腹は、四季がないといわれる亜熱帯のブラジルにも、日本ほど規則正しいものではないけれど、やはり春夏秋冬の移り変わりがあると主張し、基本

的には四季というものがあるということを前提に句を詠んでいたのです。例えば、「春雷や二人乗ったる馬に鞭」という句を詠んでいます。ブラジルの春というのは、日本で言ったら秋、8月から10月ぐらいです。

ところが、他方で四季にはとらわれない季語を模索することもずっと続いているようです。例えば、ブラジルの中でも熱帯のアマゾン地域ではそういう試みがありまして、一例を挙げれば、私は秀句だと思えますけれど、最近アマゾナス州のマナウス句会で入選した作品で、「減水期行き場失う魚の群れ」という句があります。減水期とは要するに乾季です。水が減って魚が行き場を失っているという状況を詠んだ句です。このように新しい季語概念を模索するという動きも、現地ではあるようです。最後に、移民の文化としての俳句という話に移ります。やはり、ハワイやブラジルといった大規模日系コミュニティがあるところでは、これは今も持続しているようです。それはコミュニティを統合維持するための文芸活動でもあり、一方で、その移住先の気候風土や文化に日本からの移民が適応する契機あるいは方法として、この俳句を詠むという実践は重要ではないかと言えるかと思えます。以上で終わります。ありがとうございました。

**松村:** ありがとうございます。では、松田先生、お願いいたします。

**松田:** キース先生のご講演を聞かせていただきまして、正岡子規の血縁・地縁などを通じた人的交流がいかにか正岡子規の文学、思想を深く理解するために重要か、ということについて非常に考えさせられました。お話を聞き、私自身が、自分の研究と関連して、どのようなことが言えるのか、今日はお話していきたいと思えます。私が指導する大学院生・坂本陽（ひかる）さんが、韓国から南米への移民の歴史をテーマに修士論文を執筆中です。指導するなかで、全く関係がないと考えていた自分が調査した人物（この人物に関する発表を戸田山先生には〔2023年6月の〕アメリカ学会で聞いて頂きました）が、かなり関連があるということがわかりました。今日は、これまで分かったことをお話しした後、今後どのような点に着目していくかについて、述べたいと思えます。

キース先生のご講演を通じて、やはり朝鮮半島も日本と同様、血縁・地縁に加えて、また学閥などを

考慮しなければ、政策形成やまたその歴史的出来事を解釈することができない、ということを変えて考えさせられました。戸田山先生に聞いて頂いたアメリカ学会で発表では、張俊河（チャン・ジュナ）という、韓国の「思想の父」といわれる人物に着目しました。その人物を中心に、朝鮮半島の西北地区、つまり朝鮮半島の北部の出身者であって、のちに、朝鮮半島が分断され、また朝鮮戦争（1950～53年）を経て南の方に移ってきた人物たちがどのように、「反共」の担い手となっていたのか、ということをお話ししました。これらの人たちは、〔朝鮮半島の解放（1945年）後〕プロテスタントであったため、朝鮮半島の北部で迫害を受けました。特に注目した人物が張俊河です。簡単に経歴を説明しますと、もともとの生まれが平安北道という現在の北朝鮮の出身です。父親がキリスト教のプロテスタント教派である長老教の牧師でした。朝鮮半島が日本の植民地支配下にあった1944年、日本軍として徴集され、そのあと中国戦線に送られました。6か月後に脱出して、中国軍に加わった後、中国各地で独立運動を行っていた大韓民国臨時政府傘下の光復軍の訓練を受けました。そののちに、のちにアメリカ合衆国（以下、米国）のCIAの前身であるOSS（Office of Strategic Services）という米国戦略情報局の特別軍事訓練を受け、朝鮮半島に特派されたのですが、〔1945年〕8月15日に日本が降伏したため、結局、そのまま作戦自体は行われませんでした。そして、朝鮮半島の「解放」後、『思想界』という雑誌を刊行して、何回も投獄されて、75年に疑惑の登山事故で亡くなったという人物です。この雑誌『思想界』が、実は、韓国人の南米移民について、早い段階から大きな関心を寄せ、移民を推進する役割を果たしていたことがわかりました。ブラジルなど中南米への移民が派遣されていない時期だった1961年10月に、雑誌『思想界』に三つの論文が掲載されていました。5・16軍事クーデター（1961年6月）と言って、のちに大統領に就任する朴正熙（パク・チョンヒ）少将ら若手軍人がクーデターを起こし、「国家再建最高会議」を結成した直後のことでした。例えば、朴東昴（パク・ドンミョ）という経済学者が「韓国の移民—移民政策の検討」という文章を『思想界』に掲載しています。のちに、農林部長官として、農業政策の一環で、恐らく韓国人の南米移民を推進したのではないかと、思われます。また、当時韓国では、

特に国外への移動の自由はなかったのですが、取材の一環として中南米に送られた東亜日報〔韓国の日刊紙〕の記者の記事なども掲載されていました。早い段階からメディアとして中南米の移民を促進する役割を、この雑誌『思想界』が果たしていたことが分かりました。

ちなみに、金芝河（キム・ジハ）という有名な韓国の詩人が2022年に亡くなったのですが、「五賊」という当時の財閥・国会議員を痛烈に批判した風刺詩を1970年5月に掲載したため、『思想界』自体は廃刊に至りました。全205号で、当時としては非常に限られた言論の中で先進的な役割を果たしていた雑誌でもあります。

もう一人注目したのは、張徳棋（チャン・ドッキ）という人物です。この人物もやはり朝鮮半島北部の出身で、1980年代にアルゼンチンに移民した人物です。この人物は、先ほど私が述べた張俊河と非常に親しい関係にありました。OSSの特殊訓練を張俊河と一緒に受け、やはり同じく派遣されるはずだったのですが、その作戦が中止になりました。まだ「点」と「点」であるため、張俊河は1975年に亡くなっていますし、どの程度関連があったのかについて、まだはっきりしたことは申し上げられませんが、張俊河の死後の1980年代、張徳棋はアルゼンチンへ移民しました。

今後、詳しく調査したいことについて述べ、締めくくります。朝鮮戦争を通じて、韓国軍は量的に拡大していきました。それが5・16軍事クーデター（1961年）の素地となったとも考えられます。軍が最もその当時の社会で近代的な教育を受けた人物たちが集まる場所でした。やはり軍が大きくなりすぎたことによって、整地作業、つまり増加した軍人を減らすことを目的に、南米移民が行われた可能性が高いというのがこれまで分かったことです。先ほど、当時の韓国は海外移住の自由がなかったと申しあげましたが、ところで、移民を推進していたのは韓国政府なのですけども、その中心人物は、軍事クーデターを起こし、のちの大統領に就任した朴正熙と陸軍士官学校の同期（2期）でもありました。韓国人の南米移民は、軍の内部の「整理」の一環として行われた側面があります。特に先ほど述べた人物たちは光復軍と言って、朴正熙とは違う系統の人物たちであるため、そのことが関連しているのかどうかについても、これから調査・分析したいです。

また、もう一つ、南米移民者の出身地域についても考慮する必要があるでしょう。朝鮮戦争前後に北朝鮮北部から南朝鮮（韓国）に移住した人たちのことを「越南者」と呼ばれます。その「越南者」の中には、クリスチャンが非常に多かったそうです。もともと南のほうに生活基盤を持ってない人たちであったため、その人たちがどこまで韓国国内で定着できたのかについても、考える必要があります。先ほど紹介した、雑誌『思想界』の記事には、当時の韓国は人口が多く、密集しているため、その人口過多を解消するためには移民を促進すべきだということが書かれていました。もともと南に生活基盤を持たなかった「越南者」のうち、韓国に定着出来なかった人びとの一部が南米移民に行った可能性もあるのではないかと、という仮説を持っています。これら二点について、今後調べようと考えております。以上です。

**松村：**ありがとうございます。では、渡邊先生、お願いいたします。

**渡邊：**キース・ヴィンセント先生のご講演は近代日本文学についてのものでしたが、古代ギリシャ・ローマ文学を専門とする私にとっても大変興味深いものでした。特に私が興味をひかれたのは、文学作品とそれが作成され最初に受容された時代という、周辺文脈との関係です。

文学と史学は別分野とみなされることが多く、特に純文学といわれるようなものはなにか俗世間から離れた、時代を超越したものと思われがちです。しかし私自身、文学史、思想史やその他〇〇史と呼ばれるようなものをすべて相互補完的であり、文学作品あるいは映像作品などもそれを一般聴衆として享受する、授業で教える、あるいは研究対象として扱う際、歴史的な文脈と結びつけることでいろいろ見えてくるものがありますし記憶にも残りやすいと考えています。また歴史はそのまま繰り返すことはないにせよ、バッハのフーガのようにバリエーションをつけつつ似たパターンが繰り返されることはしばしばあります。現在の状況が何を意味しているのか、しばしば私たちも考えさせられますが、過去の文学作品をその作者や同時代読者が生きた時代を思い起こしつつ読むという行為を蓄積していくと時代のパターンも見えやすくなるのではないのでしょうか。

今回キース先生の正岡子規と藤野古白に関するお話を聞いてみて印象深かったのは、日清戦争とい



う、二人が共に生きていた年月の最後に起きた大きな出来事、この背景といいますか文脈です。日本近代史に関しても私は門外漢ではありますが、日清戦争は明治日本の大きな分岐点であったと理解しています。日清戦争で日本はいわば列強の仲間入りをしたと言われますし、その結果台湾を植民地として支配するようになりました。今でも日中関係や、台湾の難しい国際的な地位などといった点でこの戦争は東アジアに大きな影を落としているといえるでしょう。そしてもちろん日清戦争における日本の勝利は、1945年の敗戦に至るまでの帝国主義的拡大の第一歩でもありました。

この日清戦争に対しての子規と古白の態度は対照的なものであったとキース先生のお話から私は理解します。子規は従軍記者として意気揚々と、日本の勝利を記録するため旅立ったのに対し、うだつが上がらない彼の親戚の古白は祖国の栄光など眼中にないかのように鬱々と暮らし、それどころか戦争が日本にとって成功裡に終結しつつある1895年春に自殺してしまいます。調べてみると、彼が亡くなったのは日清講和条約調印のほんの数日前です。これはすでにされている方々もいると思いますが、一門外漢として、彼らの作品をこのような歴史の流れの中で読み比べてみるとまたいろいろ見えてくるものがあるかと思いました。これは時間が許せば私からキース先生に直接うかがいたかったことでもあります。

古代ギリシャ・ローマの文学作品も、ペロポネソス戦争の最中に書かれたアテネの悲劇や、共和制末期混乱の中で書かれたカエサルやキケロの諸作品など、歴史的な文脈を理解したうえで読むとより味わいに富み印象に残りやすいものは多々あります。ちなみに今、私たち自身も決定的な歴史的な分岐点にあると最近よく言われます。つい先日バイデン大統領は *inflection point in history* という表現を演説の中で使いましたし、そのしばらく前にドイツの首相は *Zeitenwende* という言葉を使いこれも話題になりました。思い出すといわゆる冷戦終結時、歴史の終わりという表現が流行りましたが、国際的勢力のせめぎあいとしての歴史は終わるどころか明らかにまだまだ続いています。今まさに、文学教育や研究において作品や作者をその歴史的な文脈と共に見ていく作業は重要なのではないのでしょうか。

松村: ありがとうございます。では、松村からも発

言させていただきます。キース先生のご講演を聴いて最も印象に残ったのは、正岡子規が、いどこでもあり、同じ俳句の道歩んでいる古白が自殺をしたあと、自分の罪悪感を解消するために、古白をたたえたりせず、生前の態度を貫いたと指摘されたことです。これを聞いて、ああ、すごいなと思いました。子規はどういう思いでこのようにしたのか。これを、キース先生は、自己中心的な考え方をしなかったからというご指摘をされました。自己中心の反対は「利他」でありましょう。何かを利ずるといことはやっていないかもしれないですが、自己中心的な考え方をしなかったということは、大きな意味での「利他」ではないかと思うのです。つまり、相手に対する思いやり、また、相手に対する尊重、そういったものを持っている子規だからこそ、いろんな人から慕われたのでしょうか。ご講演の中で、狭い子規庵の中で、結核の感染のリスクがあるにも関わらず、みんなが集まってきたという話がありましたが、そういったものにつながっているのではないのでしょうか。

つまり、キース先生の最終目的は、やはり作家の心情を明らかにすることだったのではなかったのか。これは、ご参加くださった金ヨシロ先生も「新しい研究」とおっしゃいましたが、私もまさしくそのように思います。これまでこういったことは文学の世界において、されているようで、されていなかったんです。それはどうしてかという、文学というものは作品があって初めて成り立つ分野だから、作品を研究しないとイケないという考え方が非常に強かったからです。そういったなかで、キース先生は、その枠を破って、新しい心情研究をなさっているのではないか。これは考えてみると、東洋の伝統といいますか、『古今和歌集』の仮名序に「やまとうたは、人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」とあり、さらには中国の『詩経』の大序の中にも「詩は志の之く所なり」とあって、人間の心情が文学になるというような考え方、これはやはりアジア的な、東洋的な考え方なのではないか。キース先生はアメリカの方ですが、こういった東洋的な考え方を非常に深いところまで理解されて、そういう手法をご自身の研究に取り入れておられる。こういったところもすごいなと思います。以上です。

渡辺さん、せっかく来てくださったので、キース先生の講演の感想があれば言っていたらとあ

りがたいです。

**渡辺:** キース先生のご講演を聞いて、古白と正岡子規を作家として深く見ていく点が自分の研究に重なるところがありました。

私は映画を研究していて、作品をどのように捉えるかを、作品の筋書きやセリフなどを深く、細かく見ています。当然そこには作品を撮影した監督がいて、その監督の生きてきた哲学や人生観が作品に表されているので、キース先生のように作家を深く見ることが重要だと思いました。キース先生は、作家の正岡子規に対して、古白との関係や彼らの活動などさまざまなことを、細かいところまで見ていました。正岡子規の作品に関しては、作品を作った正岡子規にしかわからない意図や背景などがあると思うんですけど、正岡子規の人生を事細かに、現代に生きるわれわれが見ることで、正岡子規自身の無意識の部分にある作品の表現や感情など見ることができるのではないかと思います。自分の研究でも作品と作家というのを別々ではなく、深い関わりのあるものとして見ていきたいと思いました。

**松村:** 皆さん、ありがとうございます。せっかくですから、皆さんがご発表いただいた内容について、ご質問等を出していただけるとありがたいですが、ご自由にどうぞ。

**渡辺:** 私は、実は早めに帰らないといけないので、質問させていただければありがたいと思ったんです。木村先生の漢文に関する発表についてですけども、以前、もしかしたら漢文についてちょっとお話をさせていただいたことがあったかと思えます。正岡子規の漢詩ってどのように評価できるかということについてお伺いしたかったんですけども、中国古典全般の教養があつて、やはり漢文に、漢籍に関する教養があつたのかつていうことなんですけれども。

**木村:** 正岡子規の祖父は松山藩の儒学者で、維新後は私塾を開き、子規もそこで幼い頃に漢学を学びましたので、漢文、漢籍には深い教養があつたと思われまふ。漢詩は12歳頃から30歳頃まで作り続けました。子規の漢詩は高く評価されることも多く、子規の俳句を考える上でも軽視できないとされています。

**渡辺:** 私も近世以降のラテン文学はよく見ていて、その中でやはり詩を書く人は多いんですけども、古典的な技法をちゃんと守っているのかどうか

ていうのはやはりいろいろあつて、多分、漢詩の伝統も同じような要素はあるのだろうと思うんですけども。ありがとうございました。

**木村:** 古典的な技法という点では、正岡子規の漢詩は平仄や押韻などの形式が夏目漱石などと比べるとルールに従っていないと指摘されることもあります。

**渡辺:** ありがとうございます。では、ちょっと早めに帰らせていただきます。

**松村:** どうぞ。では、ご質問をお出しいただけると。渡辺さん、どうですか。

**渡辺:** 木村先生、お願いします。

現在の国語の教科書は実用性や創作性を求めるという話を聞いて、キース先生のご講演を聞いたあと正岡子規について調べたときに「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」ぐらいしか知らなくて。正直、あまりそんなに詩に関して、自分は小学校や中学校の教科書で経験していないなつていう、そのような経験があるんですけど、現代の国語教科書でも正岡子規はやっぱり重要性の高い作家なのでしょうか。

**木村:** 正岡子規の俳句は、俳句を学ぶ上で外せないと思うので掲載数が多いと思います。漢詩のほうは、今の学習指導要領では日本漢文を採録するように規定されているので、近代の作家の中では夏目漱石、森鷗外などと並んでよく採録されています。

創作という点について言いますと、旧制中学校の指導要領には、生徒に漢詩を創作させるという規定はありませんでした。その代わりに、教員が自分の判断で生徒に漢文による作文をさせていたようです。また、生徒が自主的に授業以外の時間に漢詩を作って先生に添削してもらったということもあつたようです。これらは授業などで今よりも多くの作品に触れてきたことも関係していると思います。最近とはとにかく表現させることを重視した分、読解の時間が減つたように思います。吸収しなければ表現はできないと思うので、そのバランスをどう調整していくかということが現在の学習指導要領の課題のような気がしました。

**松村:** いかがでしょうか。木村先生、どなたかにか？

**木村:** 俳句の英訳など、海外における俳句の紹介についてどなたかにおうかがいできればと思います。

**松村:** 戸田山先生、いかがでしょうか。海外における俳句の紹介については？



戸田山: 今回、キース・ヴィンセント先生の報告の関連ということで、俳句の海外での受容について少々調べました。その受容の歴史を見てみると、1870年代頃までさかのぼるのですが、日本には俳句というジャンルの定型詩があって、それはいったいどういったものなのかということについて、既に紹介されています。いつ頃から日本語以外の言語で俳句を詠むことが始まったのか、私は初期の例についてはわからないのですが、そういえば、キース・ヴィンセント先生の先日の講演のあとでお話をされていて、アメリカとかイギリスの英語圏の作家で、俳句をつくった方は結構多いということを知りました。例えば1930年代から50年代ぐらいに活躍したリチャード・ライトというアメリカの黒人作家がいます。ライトはフランスに移住したのですが、晩年になってからかもしれません、そこで結構俳句を詠んでいます。あと、詩人で、俳句に触発されたかたちで短い詩をつくっている例は結構いろいろあるようですから、外国語での俳句の伝統、歴史にも相当分厚いものがあるのは確かだと思います。

ただ、私は、専門は移民研究ですので、今回は日系移民による俳句の実践に今回は注目しました。お答えになっているか。

松村: ありがとうございます。では、戸田山先生からどなたかに質問を。

戸田山: 難しいですね。木村先生は、漢文がご専門ということでお伺いしたいのですが、漢詩漢文をつくる、あるいは詩吟を楽しむという伝統がずっと日本にあるわけですが、多分、俳句と比べるとかなり狭いというか、一部の層の楽しみとして続けられてきたのかと思いますが、どうでしょう。また、日本の新聞の特徴として文芸欄というものがあって、読者から俳句、川柳や短歌などの投稿を受け付けていたりしますが、あまりそういったものは、欧米の新聞で見かけることがないような気がします。例えば、近代に日本で新聞が発行されるようになって、早いうちに文芸欄が設けられていくわけですが、そこで漢詩文が投稿されていた例はございますか。

木村: 新聞の文芸欄で漢詩を扱うことは早い時期に終わったと思います。漢文による著述も明治10年代くらいまでは珍しくありませんでしたが、明治20年代くらいから日本語による著作物が増えてきたので、漢詩文の創作はその辺りから減って

いたのではないかと思います。しかし漢詩結社のような漢詩を詠む団体は存続し、漢詩を掲載する文芸雑誌も発行され続けていきます。

戸田山: そこには登場しなくなる?

木村: 新聞の文芸欄で漢詩を掲載することはおそらく昭和の初め頃になくなったと思います。

戸田山: でもその前にはあったのですか?

木村: はい、確かにありました。

戸田山: そのあとはやはり俳句だとか短歌が投稿されるのでしょうか。

木村: 全般的には調べていませんが、それらは継続していくと思います。

戸田山: 明治期の新聞は、新聞のジャンルによって文体が全く違いますよね。漢文の書き下し的な文体の、要するに教育レベルが高い人向けの新聞が一方であり、他方では小新聞といわれる口語体の新聞があったと思いますが、たぶん読者層が相当違うでしょうし、それぞれの読者にとって何が文芸であるかも、全く違っていたのでしょうか。

松村: 廣野さん、質問してみてください。

廣野: 松村先生にお聞きしたいのですが、中国や台湾で、日本の俳句はどのような評価を受けているのでしょうか。

松村: これは、木村先生のほうがお詳しいのではないのでしょうか。

木村: 1920年代に中国の文学者が日本の俳句を評論や翻訳で紹介し、そこから短い詩の創作も行われましたが、その後定着はしなかったと思います。

松村: 今、木村先生がおっしゃったように、俳句そのものはやったということはないと思うのですが、ただ、漢俳といって「五・七・五」で、ごく短い漢詩をつくる分野が改革開放後の中国でおこなわれたことがありました。傅さんは漢俳をご存じですか。

傅: 聞いたことないです。

松村: 私が1980年台初頭に留学していたときには、漢俳をつくる方がおられました。

傅: 中国に昔からある短いものとしては、対聯(対句)や、聯句といって、複数の作者が一句、または数句ずつ作り、連ねて一編の詩をなすものがありますね。

松村: 廣野さん、よろしいでしょうか。

廣野: ありがとうございます。

松村: では、傅さん、質問をお願いします。

傅: 木村先生にお伺いします。私は、日本で基礎教

育を受けていないので、実際のところがわからないんですけど、最近では、俳句などをつくることが重視されているが、それより吸収するほうが重要だとおっしゃっていたと思うんですけど、それについてもうちょっと詳しく話していただけませんか。

**木村:**カリキュラムの改訂で創作を重視するようになりましたが、それでも漢詩一首を作ることは難しいので、一句だけとか、対句を作るような活動が現在の教科書に盛り込まれました。しかし漢詩文をあまり読まずに、漢語による表現の方法を学ばずに創作をすることは難しいと思います。俳句のように日本語を使うのであれば創作も鑑賞も可能であると思いますが、漢詩については漢詩文を学んで吸収する時間が必要であるはずで、限られた授業の時間数で漢文の中で表現する活動をするなら、漢詩文に関して感想を述べあったり、感想文などを日本語でまとめたりするというのが現実的ではないかと思えます。

**傅:**ありがとうございます。私の質問は以上です。

**松村:**松田先生、どなたかに質問ございませんか。

**松田:**傅さんのゲーム「原神」の話をもう少しお聞きしたいです。先ほど、チェン・カイコー（陳凱歌）監督の映画『さらば、わが愛 霸王別姫』（1993年）の影響があるとおっしゃっていたのですが、中身や描き方が映画の影響を受けたということですか。

**傅:**もっと詳しく紹介したかったんですけど、先ほどは5分しかなかったので、言葉足らずになってしまいました。私が言いたかったのは、ゲームの中で京劇がなぜ使われたのかは、本質探究により明らかにできるのではないかということです。まず、改革開放により、日本の映画の影響を受けた監督さんが、京劇をテーマとする映画をつくり、その映画が世界中に知られたことで、「京劇」を使うと、世界中の人々に受け入れられやすいからゲームでも「京劇」を使うのではないか。このように考えると、日本と京劇はつながっているのではないかなと思いました。

**松田:**ゲーム自体は日本でも人気があるのでしょうか。

**傅:**はい。ゲーム自体は、実は今、海外の中で一番プレイヤー数が多いのは日本と韓国です。

**松村:**傅さんが今、本質探究とおっしゃっていましたが、表面的な事象を分析するだけじゃなくて、その本質的な部分、つまり根底の部分には何があ

るのかという研究方法を取っておられます。その中で、改革開放によって第五世代映画監督が出現し、第五世代を代表するチェン・カイコー（陳凱歌）監督の『さらばわが愛 霸王別姫』で描かれている京劇の世界がその根底にあるのではないか。そういったところに今、行き当たったということみたいです。ありがとうございます。

この共同研究プロジェクトは相関関係つまり諸地域の文化が、その地域、国だけで完結しているのではなく、それぞれ相関関係を有していることを明らかにしようとしています。そして今回、キース先生というアメリカの研究者が日本文学を研究なさっていて、おそらくは日本の研究者よりもより深いところまで研究をされているということ、目の当たりにさせていただきました。これが今回の最も大きな収穫だったのではないかと思います。

さらには、私たちは人文社会科学の学問をやっているわけですが、こういった学問の意義を再確認することができたと思います。人文社会科学の学問は、先ほど、傅さんが言ってくれた本質探究を目的とするのであって、この意義は大きいと思います。今、社会では新たな提案が求められています。本質を探究し、本質を具えた説得力ある提案ができることは、最も必要な能力となっているのではないのでしょうか。

あと、何か言い残したことはありませんでしょうか。では、今日は、お忙しいところ、お集まりいただき、素晴らしい発表と質疑応答をくださりまして、本当にありがとうございます。これで終わりにさせていただきます。

#### 発言者紹介（発言順）※所属はシンポジウム開催当時

松村 茂樹

大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科  
廣野 朱音

大妻女子大学大学院国際文化専修修士課程  
傅 静

大妻女子大学大学院国際文化専修修士課程  
利根川 千枝子

大妻女子大学大学院国際文化専修修士課程  
木村 淳

大妻女子大学非常勤講師

戸田山 祐

大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科

松田 春香

大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科  
渡邊 顕彦

大妻女子大学比較文化学部比較文化学科

渡辺 美波

大妻女子大学比較文化学部比較文化学科 4 年次生

## 付記

本研究は 2023 年度 大妻女子大学人間生活文化研究所 共同研究プロジェクト (K2313) 「近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係」 (研究代表者: 松村茂樹) を受けたものです。

## Abstract

On Monday, September 25, 2023, the keynote lecture of the joint research project "Correlations in Aspects of Culture in the Asia-Pacific Region in Modern Times" (Research Representative: Shigeki Matsumura) was held at the Institute for Human Life and Culture, Otsuma Women's University. The speaker was Dr. Keith Vincent, Associate Professor at Boston University, who gave a lecture in Japanese titled "Kohaku Fujino, Cousin of Shiki Masaoka, 'Like Ice Enveloping Flame'".

On Monday, October 30, 2023, a symposium was held by all the collaborators following the keynote lecture. After each participant made a comment on what he or she was inspired by Dr. Vincent's lecture, a discussion was held. This report is a record of the symposium.

(受付日: 2024 年 3 月 22 日, 受理日: 2024 年 6 月 28 日)



松村 茂樹 (まつむら しげき)

現職: 大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

プロフィール:

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士 (文学, 筑波大学)。ボストン大学客員研究員, 東京大学非常勤講師などを歴任。専門はアジア太平洋国際交流論, サーバントリーダーシップ論。

主な著書と最近の論文:

『近代中国の文化人と書』(研文出版) 『書を探る』(アートダイジェスト) 『呉昌碩談論』(編・柳原出版) 『呉昌碩研究』(博士論文・研文出版) 『「書」を考える』(二玄社) 『呉昌碩と日本人士』(「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所) 『書と画を論じる』(研文出版) 『言語文化 [文部科学省検定済教科書高等学校国語科用]』(共著・文英堂) 『古典探究 [文部科学省検定済教科書高等学校国語科用]』(共著・文英堂) 『現代中国語圏映画研究—第五世代と第六世代』(「Otsuma eBook」大妻女子大学人間生活文化研究所) 『書の語られ方 中国篇—書論通観 1』(「大妻ブックレット 11」日本経済評論社) 『書の語られ方 日本篇—書論通観 2』(「大妻ブックレット 12」日本経済評論社)

「日本における「サーバントリーダーシップ」導入—「タテ社会」を変える試み」(『コミュニケーション文化論集』第 20 号) 「「サーバントリーダーシップ」の本質」(『人間生活文化研究』No.33) 「「洗足」について—「サーバントリーダーシップ」の本質 (2)」(「大妻女子大学紀要—文系」55 号) 「2017 年 5 月 30 日」以後の大学教育—大学教員としての対応」(『コミュニケーション文化論集』21 号) 「「支配するのではなく、模範となりなさい」—「サーバントリーダーシップ」の本質 (3)」(『人間生活文化研究』No.34) 「グリーンリーフ「サーバントリーダーシップ」とキリスト教的理解」(「大妻女子大学紀要—文系」56 号) 「『ザ・ビートルズ: Get Back』に見るリーダーシップ」(『コミュニケーション文化論集』22 号)